

## 〈座談会〉 古田足日 現代児童文学のデザイン



西山 利佳  
宮川 健郎  
(司会)藤田のぼる

2014年10月3日 於：日本児童文学者協会事務局

藤田 古田足日さんが六月八日に亡くなられてから、まもなく四ヶ月になります。さすがに近年は、そうしょっちゅうお目にかかっていたわけではないので、まだ古田さんがいないということを実感できてないようなところもあるのですが、僕は三人とも新聞や雑誌に追悼文も書きまし<sup>(注1)</sup>たし、古田さんの不在ということがじわじわと本当のことになってきている、という気がします。

かつて本誌では、一九八〇年前後に十何人かの作家の個人特集を組んでいます。その中に古田足日も入っていて、一九七九年の一月号が「特集 古田足日の世界」、もう三五年前ですけれども、僕はこの時初めての編集委員をやっている、特集の企画に関わりました。

そして、古田足日については、九三年に、童心社から『全集 古田足日子どもの本』が出ています。古田さんは言うまでもなく、作家であり評論家であり、そのどちらがメインということではなくて、その二つの文学活動が否応なく結びついている、というのが特徴だと思うのですが、この全集は創作のみを収録する形になっています。ただ各巻に、「古田足日らんど」という、巻末の付録というには質量ともに豊富すぎる「おまけ」がついていて、古田さん自身のエッセイ、収録作品に関する資料、様々な方たちの古田文学に寄せるエッセイ、読者からの手紙、そして古田さんの代表的な評論の一部が、抜粋の形で掲載されています。